

去る2012年1月14日(土)にJECK創立9周年記念という大切な行事にも拘わらず、ドキュメンタリー映画「すぐそばにいたTOMODACHI」の上映をしてください、この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。ミャンマー軍事政権の専政により祖国から逃れて日本で暮らすことになったビルマ人たちが、難民として日本で極めて厳しい立場におかれ、いわば(目立たない)暮らしを余儀なくされている状況を全く顧みず、95人のボランティアグループを立ち上げ、東日本大震災の被災地へ向かうことになったその背景を綴った映画でした。

そして今ミャンマーが熱く燃えています。民主化の動きに伴って内外の情勢が激変し始めているのです。ヤンゴン空港では各国からのミャンマー語での人々が騒がしいようです。でも果たしてこのままずっと開かれた国へと変貌するのでしょうか。日本には、祖国を追われ長い間ひたすら自国の平和と民主化を追い求めてきた在日難民たちが居ります。あの震災では自分たちの置かれた状況をも顧みず、ボランティア活動のため大挙して被災地に向かった人たちが、私の映画に登場したTOMODACHIです。そして今度は今、祖国の国作り立ち上がる時がやっと到来したのです。ですが国に帰るには新たな難問・試練が待ち受けているようです。彼らは今、何を思い、何を成そうとしているのでしょうか。

今ミャンマーの内と外で起きていること。時代の過渡期の一時的現象としてこのまま見逃していいのでしょうか。今こそ、変わりゆくミャンマーの姿を日本に逃れてきたビルマ人たちの目を通して彼らのこれに立ち向かう精神に迫り、激動するミャンマーの真の姿を映し出すことが私の次の役目ではないのかと考えております。

ここではその一端を披露したいと思います。

一在日ビルマ人の今一

【帰れない在日ビルマ人達へ立ちほだかるいくつもの壁】

その一人、ウーミンさん(仮名)(58)は、民主化にもなって、今年1月末に帰国の申請をしました。しかし、160万円の税金を支払うよう言い渡されたのです。民主化とは裏腹に、脱出したビルマ人たちは、なんと国外に滞在していた分だけの税金をミャンマー政府に納めなければ正規のパスポートの発行はしないとミャンマー大使館から通告されているのです。つまり、国外へ脱出した人々には、何十万、何百万円という他国ではまねな税金徴収が待ち構えているのです。

ウーミンさんは、10年ほど前に「在日ビルマ市民工場労働組合(FWUBC)」を結成。在日ビルマ人の労働問題の相談やその解決に取り組んで来ました。今度は、これまでの体験や学んだことを活かして、在ミャンマー日系企業での働き口のチャンスを広げる窓口になったり、在日ビルマ人たちの帰国の世話役を買って出るつもりだと言います。

民主化に伴い、これから彼らが帰国していき、ミャンマー経済発展のために努めていく人も増えるであろうと期待するものの、このままでは「もったいない」と思うことがあります。在日ビルマ人たちは、日本語と日本の文化を誰よりも理解する人たちであるにもかかわらず、ミャンマー進出を目論む日本企業は、彼らを登用するという発想すらないことです。

一ミャンマーに帰国したらやりたいこと・それぞれの夢と希望一
【国づくりをめざす多くの在日ビルマ人たち】

この映画制作を通して改めて知ったことは、「困った人がいけば助ける」ということを当たり前に思う社会がミャンマーの中にあるということです。経済援助というとき、お互いの利益を追求することは大事なことです。互いの文化を知ること。そして、自分たちの生活が大変にもかかわらず自らの意思で日本のために被災地に駆けつけたビルマ人たちがいた。工場やレストランなどと限られた職業にもかかわらず仕事を掛け持ちしながら日本の社会を支えてきたビルマ人たちに今度は恩返しできるような経済援助こそ求められているのではと感じずにはいられないのです。そしてやっとここまでたどり着いた民主化プロセスを後戻りさせないためにも。

彼らは祖国の民主化を求めてデモを重ねて来ました。まさに今それが実現しようとしているのです。今度は、自分の祖国の再建というときに、どう彼らが、立ちあがって行動しようとしているのか?彼らの葛藤と希望、団結力を次の作品で映し出したいと思えます。

一むすび一

上映会会場には、これまで世界中を股にかけてご活躍され、ご自分の目で世界を見て来られた、いわば「サムライたち」で構成される専門家の方々が参集して下さいました。其のため私は最後まで恐れ至極の念を抱かずにはおれませんでした。上映後の鋭い質疑の数々にひるみ、懇親会での諸先輩の方々の豊富な経験に裏打ちされた数々のエピソードに羨望の念を抱かずにはおれませんでした。何というすごい先輩達なのだろうか。そして何と世界は広いのだろうか。

今回の私の映画に対する温かく過分な評価に甘んずることなく、これからも映画制作に邁進するつもりでございます。できるだけ早い時期に次回作品でお会いできることを願ってむすびと致します。大変ありがとうございました。



講演する北島監督と北島会員

サウジアラビア王国の水道事情

JECK評議員(JECKA理事長) 中之蘭 賢治

サウジアラビア王国(以下、「サウジアラビア」)では、国土のほとんどが砂漠・乾燥地帯であり、水資源の確保こそが国民生活と産業を支える最重要課題である。近年の急激な人口増加と都市化・工業化の進展に伴い水需要も急増しており、この問題への的確かつ迅速な対応が迫られている。

基本概要として人口は2,580万人。人口増加率2.38%。GDP4,694億ドル。国土面積215万平方kmである。

サウジアラビアの水供給の57%(47km³)は再生不可能な化石水に依存しており、再生可能な表流水や浅層地下水(化石水)は38%(31.3km³)、海水の淡水化が4%(3.3km³)、下水等の再利用水が1%(0.8km³)である。一方、水需要については、90%は農業で利用されており、生活や産業用に10%が利用されている状況である。

直面する主な課題として、都市部にける水需要の増加で、主な水源は、地下水及び海水の淡水化であるが、地下水の水質及び取水量は毎年低下している。一方で人口の増加が激しく、経済活動増により都市部の水需要が増大してきている。また、新都市建設により需要が増大しているのが現状である。

水利用の効率改善として、一人一日当たりの使用量が、ヨーロッパの2倍とされているなか、配水方法・管網形成の効率改善や家庭における使用水の必要性が高くなっている。漏水率としては、水電力省(MOWE)の発表によるとリヤド市の漏水率は、31%であり、全国平均では40%と言われている。水道料金は、海水淡水化及び輸送コストが高いので、世界で一番高い水道製造コストである。一方で利用者はほとんど製造コストを水道料金に反映していないので負担していない状況である。製造コストは、国の補助金により運営されている。

海水淡水化コストは、約100円/1m³、淡水化水送水コストは、約600円/m³、水道使用料金は、0~50ml/月で3円/月である。

今回出張目的は、無収水(注)対策の一環としてサウジアラビア国水道技術者に漏水技術を長期にわたっての研修を行い職員全員が漏水率低下に努めることであった。最初に水・電力省のサウジ次官に会って人材育成研修の重要性についてプレゼンテーションを実施して日本側の理解を得ることであった。



サウジ次官との記念写真

第1回目の研修場所として東部州のダンマン市を指名していただいた。ダンマン市水・電力省局長と研修内容・現地研修・研修時期等について協議した。サウジ人の昼食は、午後3時以降に食事を取るのが通常であり現地調査を行った後に昼食をとった。

東部州の水道水は、海水の淡水化水を一般的に使用している。淡水化水は最終的にRO膜処理した水道水を市民に供給している。

飲料水には、市販しているペットボトルの水を購入して飲用しています。我々もホテルに宿泊すると部屋に2本必ず置いてあるので冷やして飲んでいました。

食事にしても、もともと有名なカブサ料理です。数名で料理を囲んでコミュニケーションをはかるのに最高の料理と思っています。

地下水(化石水)は有限であり、あと何年汲み上げられるか個人としては、心配しています。ここて、サイズです。地下には石油の原油、化石水がありますが地下何mのところから汲み上げているよう。



RO膜処理浄水



リヤド市内風景

サウジ人の好きなカブサ料理

ダンマン市職員との会食

(回答) 地下水は、1,000m~2,000m。原油は、3,000m
温度は、地下水が60度~80度 原油は、150度以上

注) 浄水処理した水道水量と各家庭で使用した水量の差で、事業収益と成らないものを無収水量と言う。内訳としては、水道管からの漏水量、各家庭に設置してある水道メータの不感水量、局事業としての水道管洗浄用水・漏水防止作業用水・配水管等を含めた施設の局内事業用水量、公園用水、公衆便所、消防用水等がある。